2022年8月26日（金）9:30～14:30　四国地区大学教職員能力開発ネットワーク
SPODフォーラム2022「教学マネジメント入門−学修者本位で捉えなおす教育活動−」

「教学マネジメント指針」の5つの柱

広島市立大学　山咲　博昭
（h−yamasaki@hiroshima−cu.ac.jp）

本講座の到達目標

1. 教学マネジメントの５つの柱を説明することができる。
2. 学修者本位とは何かを説明することができる。
3. 所属組織における教学マネジメントの課題を抽出することができる。
4. 教学マネジメント上の課題の解決策を提案することができる。

本講座の構成

1. 教学マネジメント指針の構造
2. 指針から読み解く５つの柱

本講座の構成

1. 教学マネジメント指針の構造
2. 指針から読み解く５つの柱

「教学マネジメント指針」概要

予測困難な時代を生き抜く自律的な学修者を育成するためには、学修者本位の教育への転換が必要。
そのためには、教育組織としての大学が教学マネジメントという考え方を重視していく必要。

教学マネジメントとは

- ○ 大学がその教育目的を達成するために行う管理運営であり、大学の内部質保証の確立にも密接に関わる重要な営みである。
- ○ その確立に当たっては、教育活動に用いることができる学内の資源（人員や施設等）や学生の時間は有限であるという視点や、学修者本位の教育の実現のためには大学の時間構造を「供給者目線」から「学修者目線」へ転換するという視点が特に重視される。

教学マネジメント指針とは

- ○ 学修者本位の教育の実現を図るための教育改善に取り組みつつ、社会に対する説明責任を果たしていく大学運営すなわち教学マネジメントがシステムとして確立した大学運営の在り方を示す。
- ○ ただし、教学マネジメントは、各大学が自らの理念を踏まえ、その責任でそれぞれの実情に応じて構築すべきものであり、本指針は「マニュアル」ではない。
- ○ 教育改善の取組が十分な成果に結びついていない大学等に対し、質保証の観点から確実に実施されることが必要と考えられる取組等を分かりやすく示し、その取組を促進することを主眼に置く。
- ○ 本指針を参照することが最も強く望まれるのは、学長・副学長や学部長等である。また、実際に教育等に携わる教職員のほか、学生や学費負担者、入学希望者をはじめ、地域社会や産業界といった大学に関わる関係者にも理解されるよう作成されている。

学長のリーダーシップの下、学位プログラム毎に、以下のような教学マネジメントを確立することが求められる。

「大学全体」レベル

三つの方針

「卒業認定・学位授与の方針」（DP）、「教育課程編成・実施の方針」（CP）、「入学者受入れの方針」（AP）

教学マネジメントの確立に当たって最も重要なものであり、学修者本位の教育の質の向上を図るための出発点

「学位プログラム」レベル

Ⅰ「三つの方針」を通じた学修目標の具体化

- ✓ 学生の学修目標及び卒業生に最低限備わっている能力の保証として機能するよう、DPを具体的かつ明確に設定

Ⅱ 授業科目・教育課程の編成・実施

- ✓ 明確な到達目標を有する個々の授業科目が学位プログラムを支える構造となるよう、体系的・組織的に教育課程を編成
- ✓ 授業科目の過不足、各授業科目の相互関係、履修順序や履修要件について検証が必要
- ✓ 密度の濃い主体的な学修を可能とする前提として、授業科目の精選・統合のみならず、同時に履修する授業科目数の絞り込みが求められる
- ✓ 学生・教員の共通理解の基盤や成績評価の基点として、シラバスには適切な項目を盛り込む必要

シラバス、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、ナンバリング、キャップ制、週複数回授業、アクティブ・ラーニング、主専攻・副専攻

「授業科目」レベル

Ⅲ 学修成果・教育成果の把握・可視化

- ✓ 一人一人の学生が自らの学修成果を自覚し、エビデンスと共に説明できるようにするとともに、DPの見直しを含む教育改善にもつなげてゆくため、複数の情報を組み合わせて多元的に学修成果・教育成果を把握・可視化
- ✓ 大学教育の質保証の根幹、学修成果・教育成果の把握・可視化の前提として成績評価の信頼性を確保

ルーブリック、GPA、学修ポートフォリオ

項目の例は別途整理

Ⅳ 教学マネジメントを支える基盤（FD・SD、教学IR）

- ✓ DPに沿った学修者本位の教育を提供するために必要な望ましい教職員像を定義
- ✓ 対象者の役職・経験に応じた適切かつ最適なFD・SDを、教育改善活動としても位置付け、組織的かつ体系的に実施
- ✓ 教学マネジメントの基礎となる情報収集基盤である教学IRの学内理解や、必要な制度整備・人材育成を促進

Ⅰ～Ⅴの取組を、大学全体、学位プログラム、授業科目のそれぞれのレベルで実施しつつ、全体として整合性を確保。

学位プログラム共通の考え方や尺度（アセスメントプラン）に則り、大学教育の成果を点検・評価

Ⅴ 情報公表

- ✓ 各大学が学修者本位の観点から教育を充実する上で、学修成果・教育成果を自発的・積極的に公表していくことが必要
- ✓ 地域社会や産業界、大学進学者といった社会からの評価を通じた大学教育の質の向上を図る上でも情報公表は重要
- ✓ 積極的な説明責任を果たすことで、社会からの信頼と支援を得るという好循環の形成が求められる

積極的な説明責任

社会からの信頼と支援

教学マネジメント指針の構造（定義）（文部科学省，2020）

教学マネジメントの定義

- 教学マネジメントは「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」と定義でき、大学の内部質保証の確立にも密接に関わる重要な営みである（大学設置基準等の法令、設置認可審査、認証評価制度等の国が責任を有する質保証と一体不可分の側面がある）。

教学マネジメントの確立に向けた取組み

- 三つの方針に基づく体系的で組織的な大学教育を展開し、その成果を学位を与える課程（学位プログラム）で点検・評価し、改善に取組むこと
- 学生の学修成果に関する情報や大学全体の教育成果に関する情報を的確に把握・測定し、教育活動の見直し等に適切に活用すること

教学マネジメント指針の構造（定義）

教学マネジメントの定義

（文部科学省，2020）

- 教学マネジメントは「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」と定義でき、大学の内部質保証の確立にも密接に関わる重要な営みである（大学設置基準等の法令、設置認可審査、認証評価制度等の国が責任を有する質保証と一体不可分の側面がある）。

内部質保証の定義

（学校教育法第110条第2項細目省令）

- **教育研究活動等の改善**を継続的に行う仕組みに関すること

内部質保証と教学マネジメントは**類似する概念**である。
対象範囲（「教育目的の達成」「教育研究活動等の改善」）が異なる。

教学マネジメント指針の構造（対象）（文部科学省，2020）

教学マネジメント指針とは

- 三つの方針に基づき、学修者本位の教育の実現を図るための教育改善に取り組みつつ、社会に対する説明責任を果たしていく大学運営、すなわち教学マネジメントがシステムとして確立した大学運営の在り方を示すことにより、教学マネジメントの確立に向けた各大学の真剣な検討と取組を促す契機とすることを目的として作成された。
- この指針は大きな方向性を指し示すものであり、そのまま従う「マニュアル」ではあることを意図していない。

教学マネジメント指針の対象範囲

- 学士課程、短期大学の課程（修士課程、博士課程も含む）
- 正課教育（大学が主体的に関与し、責任を有する正課外活動も含む）

教学マネジメント指針の利用者

- 学長・副学長や、学部長など個々の学位プログラム構築・運営の責任者

教学マネジメント指針の「肝」①

1. **三つの方針**に基づく学修者本位の教育実現を念頭に置いている。
2. **三つの方針**に基づく**体系的で組織的な教育**の展開を念頭に置いている。
3. **学位プログラム**による運用を重視している。

教学マネジメント指針の構造（5つの柱の関係性）

Ⅳ教学マネジメントを支える基盤

FD・SD・IR

Ⅰ「三つの方針」を通じた学修目標の具体化

評価可能なDPの設定
三つの方針の一貫性

Ⅱ授業科目・教育課程の編成・実施

CPと連関した教育課程編成
DP・CPを踏まえた授業科目の配置

カリキュラムツリー
カリキュラムマップ
ナンバリング

Ⅲ学修成果・教育成果の把握・可視化

アセスメントプランに基づく
DPに掲げる学修目標の測定・評価

アセスメントプラン
ルーブリック
学生調査（卒業時）

Ⅴ情報公表

教学マネジメント指針の構造（カリキュラム編成の基本原理）

カリキュラム編成の基本原理（タイラー原理）

（タイラー，1978）

教育目標と授業と評価を一貫したものにすることを強調したモデル

1. どのような教育目的を達成するように努めるべきか。
2. これらの目的を達成するために、いかなる教育的経験を用意できるか。
3. これらの教育的経験はどのようにすれば効果的に組織することができるのか。
4. これらの目的が達成されたかどうかをいかにして判定できるか。

学生が達成する教育の成果を定めてから授業を設計するカリキュラム編成の方法である**「逆向き設計」**として方法が洗練されている。

※中井編（2021）を参照

教学マネジメント指針の構造（学修目標のエビデンス）

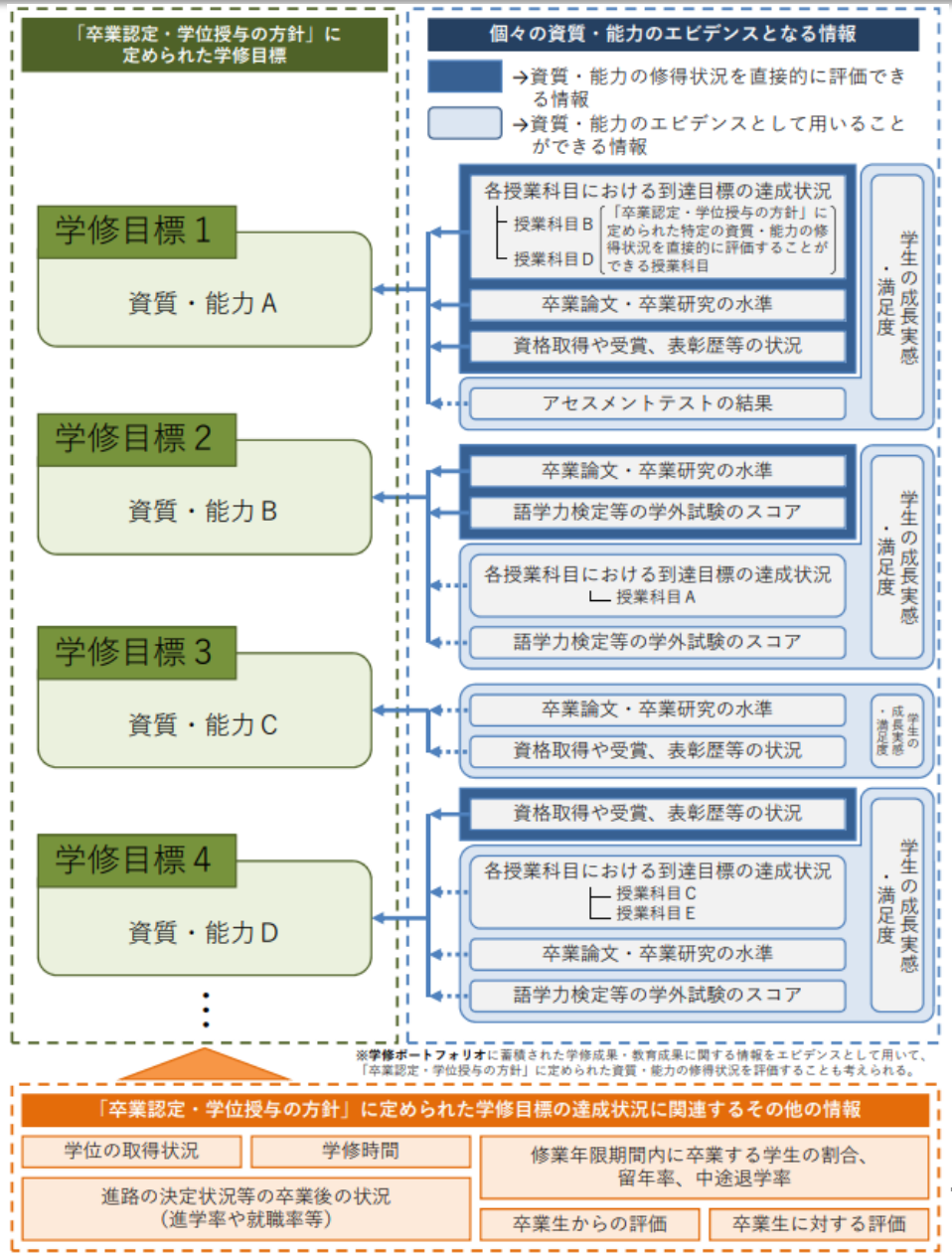
「卒業認定・学位授与の方針」に定められた学修目標と学修成果・教育成果に関する情報の関係（イメージ）（文部科学省，2020）

- 様々な情報を組み合わせてディプロマ・ポリシーに定めた学修目標の達成状況を明らかにする。
- その際、ディプロマ・ポリシーの各項目に紐づけて整理する必要がある。

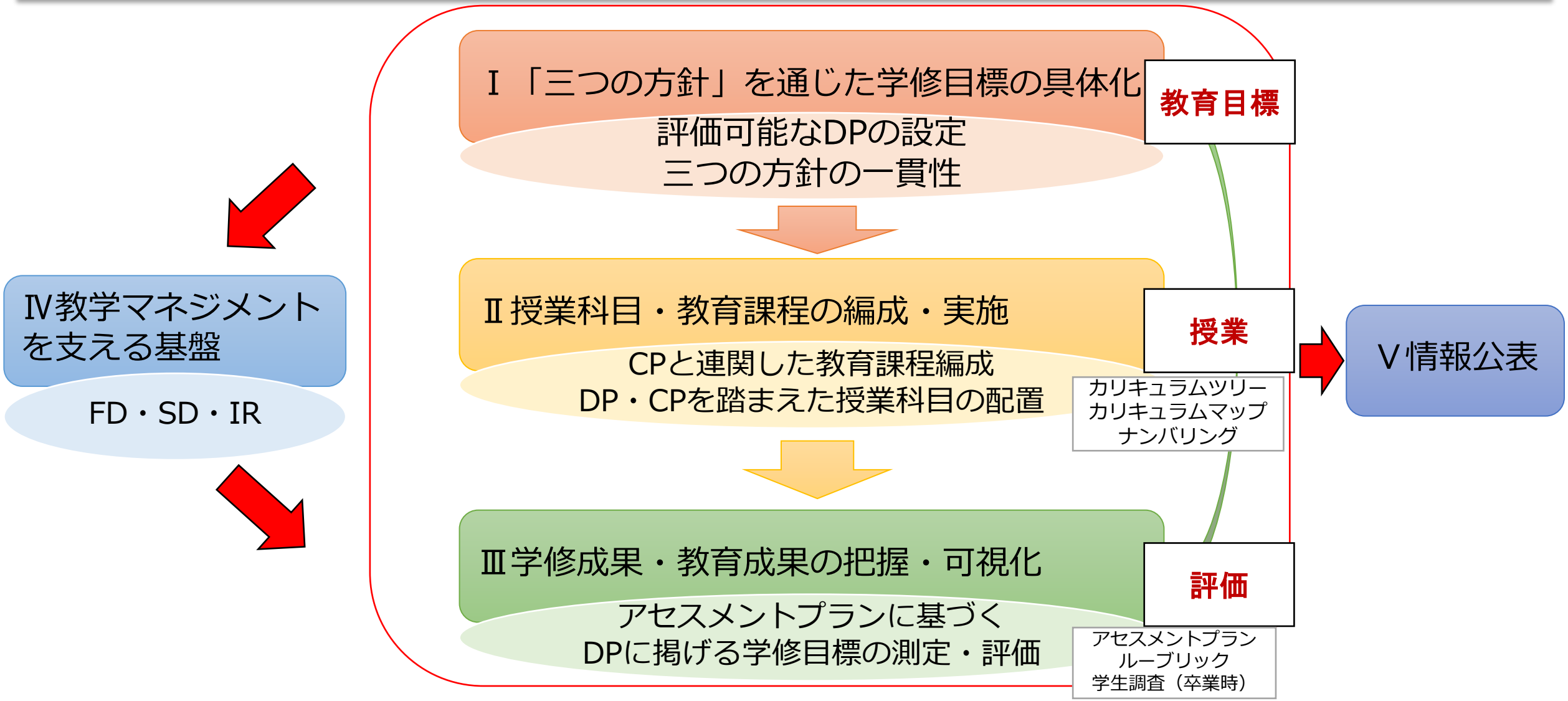
予め以下のツールを活用し、ディプロマ・ポリシーの達成状況を把握しやすい環境を整備することが考えられる。

- カリキュラムツリー、マップ
- アセスメントプラン
  - ➢ アセスメントポリシー、チェックリスト　など

ディプロマ・ポリシーに掲げた学修目標に対する評価指標の設定を求めている。



教学マネジメント指針の構造（5つの柱の関係性）



指針は**「逆向き設計」**を踏まえた５つの柱から構成されている。

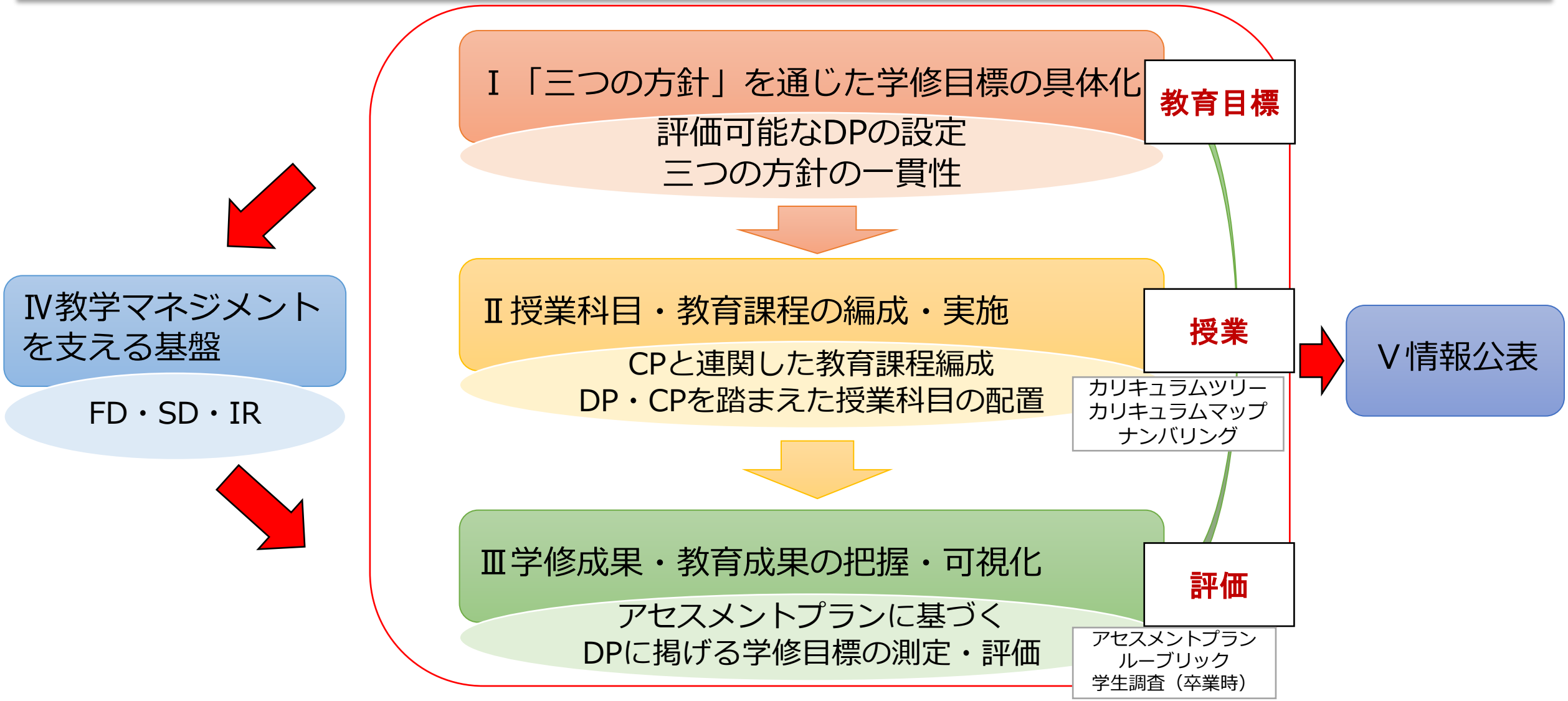
教学マネジメント指針の「肝」②

1. 教学マネジメント指針の構造は、**カリキュラム編成の基本原理**や**「逆向き設計」の考え方**を踏まえている。
2. 教学マネジメント指針は、**教育目標→授業→評価の一貫性**を踏まえて構成されている。

本講座の構成

1. 教学マネジメント指針の構造
2. 指針から読み解く５つの柱

【再掲】教学マネジメント指針の構造（5つの柱の関係性）



指針は**「逆向き設計」**を踏まえた５つの柱から構成されている。

指針から読み解く5つの柱（Ⅰ）

「三つの方針」を通じた学修目標の具体化

（文部科学省，2020）

出発点である「三つの方針」とディプロマ・ポリシー（DP）に掲げる学修目標の具体化

- 各大学の強みや特色が反映された三つの方針は、**教学マネジメントの確立に当たって最も重要なもの**であり、**学修者本位の教育の質の向上を図るための出発点**ともいえる存在である。
- 「卒業認定・学位授与の方針」（以下、「ディプロマ・ポリシー（DP）」）は、学生の学修目標として、また、卒業生に**最低限備わっている能力を保証するもの**として機能すべきものであり、**具体的かつ明確に定められる**ことが必要である。
- 大学教育の成果を学位プログラム共通の考え方や尺度（アセスメントプラン）に則って点検・評価することが、教学マネジメントの確立に当たって必要である。

「三つの方針」は**出発点**である。ディプロマ・ポリシー（DP）は、①**具体的かつ明確に定められる**こと、②アセスメントプランに則って**点検・評価ができる**ことが求められている。

指針から読み解く5つの柱（Ⅱ）

授業科目・教育課程の編成・実施

（文部科学省，2020）

体系的かつ組織的な教育課程の編成

- **「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー（DP））に定められた学修目標を達成する観点**からは、**明確な到達目標を有する個々の授業科目**が学位プログラムを支える構造となるように、体系的かつ組織的な教育課程が編成される必要がある。
- 授業科目・教育課程の編成に当たっては、授業科目が過不足なく設定されているかや、各授業科目相互の関係、履修順序や履修要件の検証が必要である。
- 密度の濃い主体的な学修を可能とする前提として、授業科目の精選・統合のみならず、学生が同時に履修する授業科目数の絞り込みを行うことが求められる。

カリキュラムマップ（DPの学修目標と授業科目の関係性）、**カリキュラムツリー**（履修順序）の策定過程を通じた**点検・評価**を行うことが体系的かつ組織的な教育課程の編成を行う一歩となる。

指針から読み解く5つの柱（Ⅱ）

大学の理念・目的
教育研究上の目的

学位授与方針
（ディプロマ・ポリシー）

教育課程の編成・実施方針
（カリキュラム・ポリシー）

学生の受け入れの方針
（アドミッション・ポリシー）

三つの方針

①一貫性があるのか？
(1)全学→学部→学科の一貫性があるのか？
(2)DP→CP→APの一貫性があるのか？
(3)CPと教育課程の内容が連動しているのか？
(4)APと入試制度が連動しているのか？
②学位プログラムごとに策定されているのか？
③全学部・学科の三つの方針の統一性があるのか？
④DPの学修目標のレベルが高すぎないか？
⑤DPがアセスメントが可能な項目となっているのか？

教育課程

教育課程の体系性

カリキュラムマップ

	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体性・協働性
心理学	◎	○	
・・・・・・・（以下、略）・・・・・・・			

教育課程の順次性

カリキュラムツリー
＋
ナンバリング

カリキュラムマップ策定上の留意点
カリキュラムにおいて全ての学生がDPの全てを修得できるようになっているか？

シラバス
科目の到達目標にどのDPの学修目標の習得を目指すか明示する

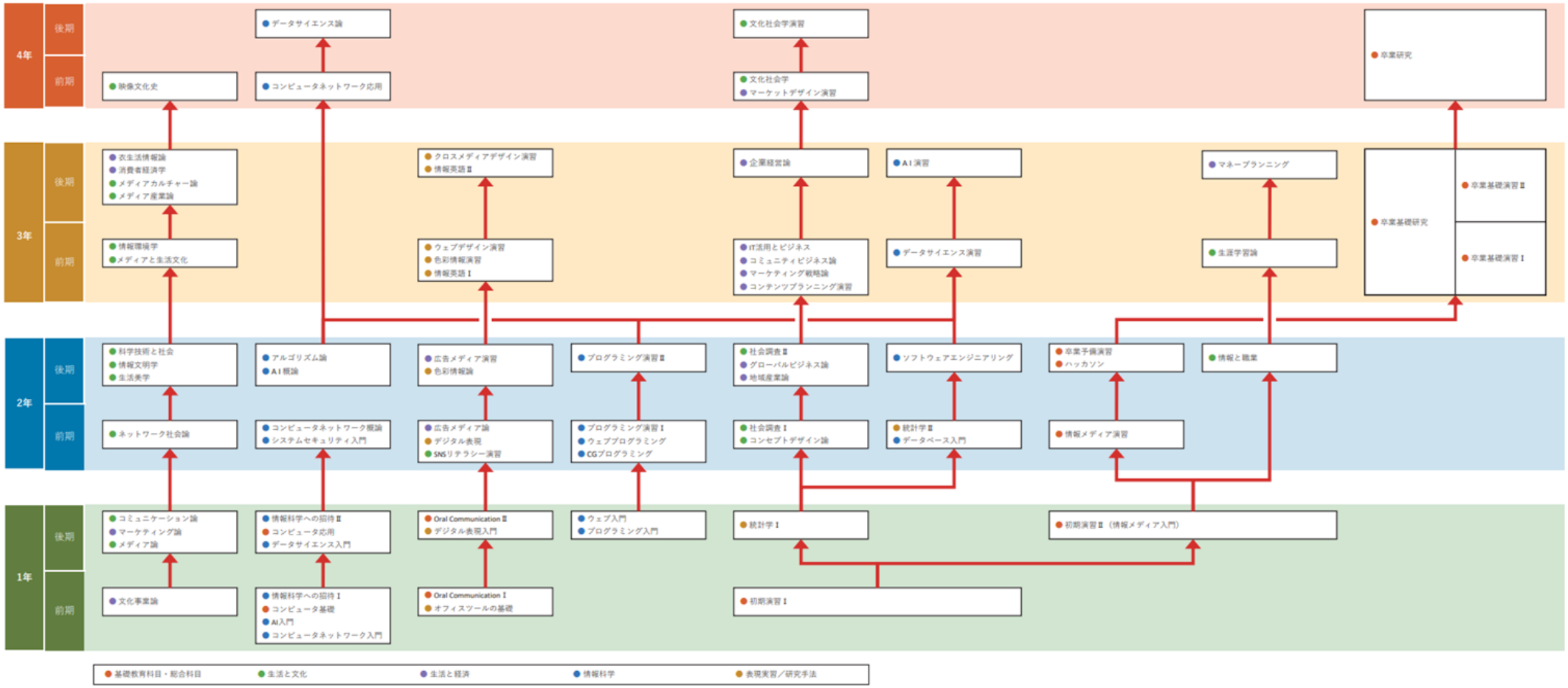
各種入試制度

指針から読み解く5つの柱（Ⅱ）【参考】

武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科　カリキュラムツリー

2022年度　情報メディア学科（情報メディア専攻）

DP1		DP2		DP3		DP4		DP5
1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	4-1	4-2	5-1
社会生活に関わる事象に対し、社会的・経済的な観点から専門的な知識を有している。	社会生活に関わる事象に対し、情報科学の観点から専門的な知識を有している。	ソーシャルネットワークを活用するためのコミュニケーションやプレゼンテーションに関する技術を有している。	コンピュータ等のICT機器を活用して、情報を加工・分析するための技術を有している。	社会的・経済的な観点から身につけた専門的な知識や技能から、ICT社会の課題を論理的に分析し、問題を解決する能力を有している。	情報科学の観点から身につけた専門的な知識や技能から、ICT社会の課題を論理的に分析し、問題を解決する能力を有している。	ICT社会における課題を自ら発見し、他人との協働を通して解決しようとする積極的な態度を修得している。	生涯にわたって自分の社会的キャリアを開拓し、社会の発展に貢献する意欲と向上心を修得している。	文理にわたる専門的知識・技術の統合を図り、ICT社会において、新しい価値を創出できる能力を修得している。



指針から読み解く5つの柱（Ⅱ）【参考】

武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科　カリキュラムマップ

令和4年度入学生用カリキュラムマップ

【情報メディア学科】

【1年前期・基礎】

科目番号	科目名	学年	科目目的	到達目標	ディプロマ・ポリシーの項目番号 凡例：◎ディプロマ・ポリシー達成のために特に重要な科目 ○ディプロマ・ポリシー達成のために重要な科目								
					1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	4-1	4-2	5-1
22UIMC1001	初期演習Ⅰ	1	本学で修得すべきことは何かを理解し、自主的に学び新たな発見を導きだせる力を身につけることを目的とする。このため、本学の「立学の精神」「教育目標」を知り、本学学生としての誇りと自覚を持つ。さらに、主体性・論理性・実行力を培い、女性として有為な社会人となるために、それぞれの学部学科の専門性に基づく知識と社会人基礎力の修得の必要性を理解し、各自のキャリアデザインを自ら構築する。	大学の修学の基礎となる単位制を理解し、適切な履修計画に沿って修学する主体性、考える力を身につけ、所属学科の3つのポリシーに基づく専門教育の概要を把握し、自らのキャリアデザインを組み立てる力を身につける。また、良識ある社会人となるための社会人基礎力の必要性を理解し、その基盤となる十分なコミュニケーション能力を培い、基本的な社会ルールを理解し、本学学生としての誇りと自覚を身につける。さらに、学習・研究を進める上での倫理の基礎となる情報の取り扱いに関する知識を身につける。					◎	◎			
22UIMC1002	初期演習Ⅱ（情報メディア入門）	1	「初期演習Ⅱ」の目的は、初年次学生が、学院の教育理念と歴史について学び、本学学生としての誇りと自覚を持ち、大学生にふさわしい主体性・論理性・実行力を培い、学部・学科の教育目標を達成するように導くことである。	1．「立学の精神」、それに基づく「教育目標」、「教育推進宣言」、学院の歴史について理解する。 2．主体的に学び、実践する姿勢を身につけ、積極的に意見を発表・伝達するために、本を読み、自ら考え、文章に表現するなどの基礎的な能力を養う。 3．学生相互や担任教員との豊かで円滑な人間関係の基礎を築く。 4．女性として社会で活躍するための、キャリア形成の基礎を身につける。							◎	◎	
22UIMC1003	コンピュータ基礎	1	実社会での活動において、IT（情報技術）に関する基礎知識は必須と言われており、ITを軸にした形で社会の営みを理解することが重要である。 本講義では、ITに関する基礎的知識を身につけ、組織運営や商取引にITがいかに活用されているかを正しく理解することを目的とする。	情報メディア学科で開講する各種の専門科目（情報技術系、経営学系）を実践的に理解するための基礎知識を獲得する。また、IPAが主催する国家資格「ITパスポート試験」に合格することを目指す。		◎		○					
22UIMC1004	コンピュータ応用	1	実社会での活動において、IT（情報技術）に関する基礎知識は必須と言われており、ITを軸にした形で社会の営みを理解することが重要である。 本講義では、ITに関する基礎的知識を身につけ、組織運営や商取引にITがいかに活用されているかを正しく理解することを目的とする。	情報メディア学科で開講する各種の専門科目（情報技術系、経営学系）を実践的に理解するための基礎知識を獲得する。また、IPAが主催する国家資格「ITパスポート試験」に合格することを目指す。		◎							
22UIMC1005	Oral Communication Ⅰ	1	英語でコミュニケーションを図る際のフォーマットを確認しながら、実際に「英語を使う」ことを経験することによって、コミュニケーション能力を養う。	1．基本的な日常の英語会話ができる。 2．英語の基礎文法や語彙を理解する。			◎						
22UIMC1006	Oral Communication Ⅱ	1	英語でコミュニケーションを図る際のフォーマットを確認しながら、様々な場面設定の中で、実際に「英語を使う」ことを経験することによって、コミュニケーション能力を養う。	1．様々な場面での基本的な英語会話ができる。 2．英語の基礎文法や語彙を理解する。			◎						

指針から読み解く5つの柱（Ⅱ）【参考】

授業科目・教育課程の編成・実施

カリキュラムマップの策定過程での活用方法

- ディプロマ・ポリシー（DP）に掲げる学修目標を達成するためにどの授業科目が寄与するかを整理することができる。
- 卒業までに身につけるべき能力のなかで授業科目数の過不足がないかを確認する。
  - ４年間を通じて学生が一つも受講することなく卒業できるような能力（ディプロマ・ポリシー（DP）に掲げる学修目標）がないか。
  - 知識や技能を培う授業科目が多い、主体性や協働性を培う授業科目が少ない等のアンバランスが生じていないか（学力の三要素）。

指針から読み解く5つの柱（Ⅱ）【参考】

三つの方針

1. 一貫性があるのか？
   1. 全学→学部→学科の一貫性があるのか？
   2. DP→CP→APの一貫性があるのか？
   3. CPと教育課程の内容が連動しているのか？
   4. APと入試制度が連動しているのか？
2. 学位プログラムごとに策定されているのか？
3. 全学部・学科の三つの方針の統一性があるのか？
4. DPの学修目標のレベルが高すぎないか？
5. DPがアセスメントが可能な項目となっているのか？

指針から読み解く5つの柱（Ⅲ）

学修成果・教育成果の把握・可視化について

（文部科学省，2020）

学修成果・教育成果の把握・可視化の目的

- 一人一人の学生が自らの学びの成果（学修成果）として身に付けた資質・能力を自覚できるようにすることが重要である。このため、「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー（DP））に定められた学修目標の達成状況を可視化されたエビデンスとともに自ら説明できるようにすること。なお、複数の情報を組み合わせた多元的な形で行う必要がある。
- 大学が「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー（DP））に定める資質・能力を備えた学生を育成できていること（教育成果）を学修成果と同様に説明できるようにすること。

学習者である学生及び大学には、「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー（DP））の達成度合いをエビデンスを交えて説明できること。

指針から読み解く5つの柱（Ⅲ）

学修成果・教育成果の把握・可視化について

（文部科学省，2020）

学修成果の把握・可視化に関する取組みで求められること

- 「卒業認定・学位授与の方針」と教育課程、各授業科目との対応関係が、カリキュラムマップ・ツリー、ナンバリングの実施、シラバスによって示されている。
- 成績評価方針が全学で統一され、適切な評価方法によって厳格に実施している。
- アセスメントプランを定めるなど、学習成果の測定・把握方法を予め明文化し、その方針・手続きに沿って実施している。

- 「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー（DP））の記述の見直しを行う。
- DPと教育課程、各授業科目との対応関係を各種ツールを活用して示す。
- 学修成果を把握・可視化する方法等に関する方針・手続きを定める。
- 学生自身が自らの状況を把握できる仕組みを構築する。

指針から読み解く5つの柱（Ⅲ）

１．大学の教育活動に伴う基本的な情報であって全ての大学において学内で収集可能と考えられるものの例

各授業科目における到達目標の達成状況
学位の取得状況
学生の成長実感・満足度
進路決定状況等の卒業後の状況（進学率や就職率など）
修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率
学修時間

学生アンケート（新入生・在学生・卒業生）、
学修ポートフォリオ、その他の外部テスト

２．教学マネジメントを行う上で各大学の判断の下で収集することが想定される情報の例

「卒業認定・学位授与の方針」に定められた特定の資質・能力の修得状況を直接的に評価することができる授業科目における到達目標の達成状況
卒業論文・卒業研究の水準
アセスメントテストの結果
語学力検定等の学外試験のスコア
資格取得や受賞、表彰歴等の状況
卒業生に対する評価
卒業生からの評価

民間企業実施のアセスメントテスト
学生アンケート（新入生・在学生・卒業生）、
学修ポートフォリオ、ルーブリック
卒業生対象のアンケート

※教学マネジメントを推進するに際して必要な情報例が以上に示されている。

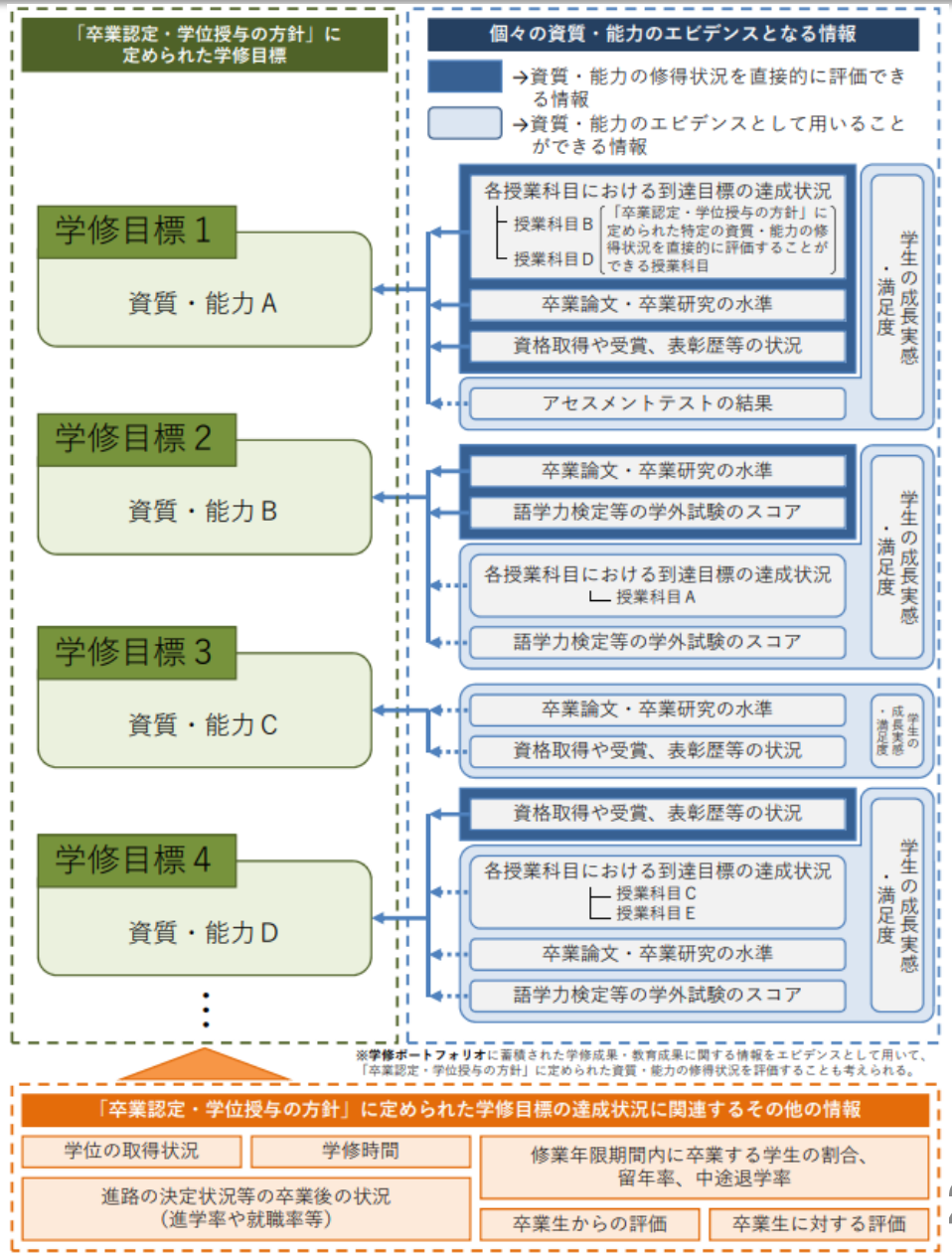
【再掲】教学マネジメント指針の構造（学修目標のエビデンス）

「卒業認定・学位授与の方針」に定められた学修目標と学修成果・教育成果に関する情報の関係（イメージ）（文部科学省，2020）

- 様々な情報を組み合わせてディプロマ・ポリシーに定めた学修目標の達成状況を明らかにする。
- その際、ディプロマ・ポリシーの各項目に紐づけて整理する必要がある。

予め以下のツールを活用し、ディプロマ・ポリシーの達成状況を把握しやすい環境を整備することが考えられる。

- カリキュラムツリー、マップ
- アセスメントプラン
  - ➢ アセスメントポリシー、チェックリスト　など



ディプロマ・ポリシーに掲げた学修目標に対する評価指標の設定を求めている。

指針から読み解く5つの柱（Ⅲ）

大学の理念・目的
教育研究上の目的

↓

学位授与方針
（ディプロマ・ポリシー）

↓

アセスメント・ポリシー

↓

DPの学修目標の測定

アセスメントプラン（カリキュラムアセスメント・チェックリスト）

名称	実施時期	実施頻度	対象	質問項目（対応するDP含む）	手法	評価者	実施者	DP評価への使い方
学生調査(卒業予定者)	12月	毎年	卒業予定者	DPに示された資質能力の修得状況	web	学生	内部質保証委員会	DP全項目の到達度の自己評価
卒業研究発表	2月	毎年	卒業予定者	研究内容と発表を通して、DPに示された資質能力の修得状況	ルーブリック	教員	学科・専攻	DP全項目の到達度の客観評価
・・・・・・・・・・・・・・（以下、略）・・・・・・・・・・・・・・								

ルーブリック

DP項目	項目	5	4	3	2	1
主体性	積極性	自ら興味を持って課題への取り組みや関連する知識の取得を能動的に遂行できる。	積極的に課題へ取り組み、問題解決しようと努力する。	指導教員や上級生の指導を尊重して、課題への取り組みができる。	研究として行うべきことを理解できておらず、指導教員の指示を待つ状態が多い。	指導教員に従わず、課題に取り組むことができない。
思考力・判断力主体性	理解度	国内外の様々な研究に関する最新情報を自ら調査し、研究に関連付けできる。	教員の指導に基づいて、国内外の関連研究に関する情報を整理して、研究に関連づけできる。	国内外の関連研究についても把握できているが、情報を整理して研究に利用ができない。	指導教員が直接伝えた研究内容は理解している。	研究内容をあまり理解できていない。
・・・・・・・・・・・・・・（以下、略）・・・・・・・・・・・・・・						

指針から読み解く5つの柱（Ⅳ）【参考】

教学マネジメントを支える基盤（FD・SDの高度化、教学IR体制の確立）

（文部科学省，2020）

FD・SDの高度化

- ＦＤ・ＳＤは、学修成果・教育成果の把握・可視化により得られた情報の共有、課題の分析、改善方策の立案等、実際に教育を改善する活動として位置付け、実施する必要がある（対象者の役職や経験に応じた適切かつ最適なＦＤ・ＳＤを組織的かつ体系的に実施していく必要がある）。

- 大学全体としての教育理念や「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー（DP））、これらを踏まえた望ましい教職員像をＦＤ・ＳＤを通じて共有し、関係者間で共通理解を構築することが必要である。

指針から読み解く5つの柱（Ⅳ）【参考】

教学マネジメントを支える基盤（FD・SDの高度化、教学IR体制の確立）

（文部科学省，2020）

教学IR体制の確立

- 教学IRは、教学マネジメントの基礎となる情報を収集する上での基盤であり、学長をはじめとする学内の理解を促進するとともに、教学IRを実施する上で必要となる制度の整備や人材育成を進めていく必要がある。

- 教学IRの主たる役割は、大学全体の関係者、とりわけマネジメント層が教学改革について正しい判断を行うために必要なデータを収集・分析し、一定の目標達成に資する情報として提供すること。
- IRの実施は、大学の規模等に応じて多様な在り方が考えられることから、各大学において最適な体制や方法を見出していく必要がある。
- ベンチマークを積極的に推進することも期待される。

指針から読み解く5つの柱（Ⅴ）【参考】

情報公表について

（文部科学省，2020）

- 学生や学費負担者、入学希望者等の直接の関係者に加え、幅広く社会に対して積極的に説明責任を果たしていくことが必要である。
- 今後、各大学がその有する強みと特色を生かして学修者本位の観点からその教育を充実していくためにも、学生の学修成果や大学全体の教育成果に関係する情報をより自発的・積極的に公表していくことが必要となる。
- 社会との関係の深化に伴い、地域社会や産業界、大学進学者等の大学の外部からの声や期待を意識し、社会からの信頼と支援を得るという好循環を形成するため、さらに、社会からの評価を通じた大学教育の質の向上を進めるためにも、情報の公表を積極的に進めることが必要である。

指針から読み解く5つの柱（まとめ）

1. ディプロマ・ポリシー（DP）は、教学マネジメントの出発点。①**具体的かつ明確に定められる**こと、②アセスメントプランに則って**点検・評価ができる**こと
2. 体系的かつ組織的な教育課程の編成を通じて、**点検・評価**し、**改善のきっかけ**とする。

参考・引用文献

- 文部科学省（2020）「教学マネジメント指針」（中央教育審議会大学分科会）
- ラルフ・W・タイラー（金子孫市監訳）（1978）『現代カリキュラム研究の基礎－教育課程編成のために』日本教育経営協会
- 中井俊樹編著（2021）『大学SD講座２　大学教育と学生支援』玉川大学出版部

ご清聴ありがとうございました。

3つのひかり　未来をつくる
広島市立大学
Hiroshima City University